

いばらき

シナリオ素材集

茨城は

「映画・テレビドラマの素材が凝縮」

そして

「シナハン・ロケハンの支援」

ロケ地

「茨城を丸ごとお貸しします」



制作：茨城県フィルムコミッション推進室

— はじめに —

茨城県は、映像制作を支援する『いばらきフィルムコミッション』を平成14年に設立して以来、ジャパンフィルムコミッションや県内市町村フィルムコミッションと協働し、2,000作品を超える映画やテレビドラマなどに協力しています。

近年、シネマコンプレックスの登場により、幅広い層で映画人口が増え、映像への関心が定着しつつあります。

このような中、幕末や戦後日本の復興・高度経済成長期など、「歴史の転換期」や「熱気に満ちあふれる時代」を描いた作品が、人々の心にノスタルジックを与え好評を博しています。

また、一方では松下幸之助、水木しげる、塚原ト伝などに見られるように、人物の「大成までの道のり」や「波乱の生涯」を描いた作品がテレビドラマとして放送されています。

このような状況を踏まえ、全国的に活躍した江戸時代以降の本県ゆかりの人物像を素材にして、

- ①ストーリー
- ②主な関連人物
- ③主な文献等
- ④主なロケ地

として取りまとめました。

当冊子は、本県への関心を持って頂くとともに、シナリオづくりの一助となるよう作成いたしました。

是非ご活用いただければ幸いと存じます。

— 目 次 —

❶ 徳川 光圀	1
（天下の副将軍水戸黄門）	
❷ 飯塚 伊賀七	2
（からくり伊賀七と呼ばれた発明家）	
❸ 間宮 林蔵	3
（「文政の三蔵」と呼ばれる江戸時代後期の隠密探検家）	
❹ 黒澤 止幾	4
（女性教師第1号）	
❺ 藤田 東湖	5
（幕末の水戸藩の英傑）	
❻ 木村 安兵衛	6
（あんパンの発明者）	
❼ 川崎 八右衛門	7
（明治時代を代表する実業家）	
❽ 神谷 傳兵衛	8
（日本初のワイナリーの創設者）	
❾ 横山 大観	9
（近代日本画の至宝）	
❿ 小平 浪平	10
（日立製作所創設者）	

⑪ 長塚 節	11
（農民小説の先駆者）	
⑫ 野口 雨情	12
（赤い靴など童謡の詩人）	
⑬ 吉田 正	13
（国民歌謡の作曲家）	
⑭ 坂本 九	14
（昭和の人気歌手）	
⑮ 住井 すゑ	15
（自由と平等を訴えた女流作家）	

参考資料

主なロケ地	16 ～ 20
いばらきフィルムコミッション	21

ストーリー

光圀は、水戸初代藩主徳川頼房の三男として生まれる。寛政10年5才の時、水戸徳川家の跡継ぎに決まり、その後、寛文元年水戸藩第2代藩主となり、30年間藩政を執り、人々から名君と称えられる。

光圀は、6才で江戸入りし、将軍徳川家光と会い、家光の名前の字を与えられ、光国と名乗る。(56才の時「光圀」と改名)

父は、12才の光圀を立派な武将にするため、水泳の腕前を試そうと浅草川(現在の隅田川)に連れて行く。浅草川は、飢饉のため飢えで死んでしまった人が川に浮かんでいましたが、光圀はその中を泳いで渡るほど肝が据わっていました。

その後光圀は、街中でも人目を引くような派手な格好で歩き回り「歌舞伎者」と言われ家来を困らせることがありましたが、18才のときに司馬遷の『史記』を読んで感動し、自分のふる舞いを振り返り改めることとした。

藩主となった光圀は、簡単に手に入る材料で薬を作る方法を記した書物「救民妙薬」を作成したり、水道の敷設や寺院の整理など領民のために様々な施策を実施した。また、蝦夷地の探検のため「快風丸」と名付けた巨大な舟も造らせた。そして、水戸藩の大事業となった新しい日本の歴史書「大日本史」の編纂を始め、全国からたくさんの優れた学者を招きこの事業にあたらせた。しかし編集は光圀が存命中には完成せず、250年歳月を要することとなった。

主な関連人物

徳川秀忠、徳川家光など

主な文献

「水戸市史」中巻(一)(水戸市・1968)

「徳川光圀」(鈴木暎一・吉川弘文館・2006)



ストーリー

代々名主を務める飯塚家に生まれる。(現：つくば市) 寛政から天保にかけて7か村の名主を務めるとともに、数理に明るく、発明心に富み、職務の傍ら、建築や機械類の発明と研究やに打ち込む。

ある日、飯塚家の母屋が火事で焼け、伊賀七は、自ら設計し母屋を建て直す。昭和25年に解体した時、びっくりするような隠し部屋があることが発見された。また、一見、茅葺きの普通の物置のようですが、屋根は五角すいで、中央の柱から傘の骨のように10本の小柱が放射線に出ており歯車仕掛けの米をつく機械が取り付けられている「五角堂」を建設する。

さらに、文政5年には、自分の敷地内に「時計堂」を建て、朝夕の鐘や太鼓、笛を合奏させて村内に時刻を知らせ、同時に時計と合わせて自宅の門の扉を自動で開け閉めさせることが出来る大時計を発明した。

一方、天保4年には、水車や風車を用いなくても、歯車と重りだけで製粉と精米を行う自動農業用機械を発明するなど、人々のために発明と研究を続けた伊賀七は、地域の人から慕われている。

主な関連人物

広瀬周度（蘭学者）など

主な文献

「郷土の先人に学ぶ」（茨城県教育委員会・1986）
「飯塚伊賀七」（谷田部町文化財保存会・1963）



ストーリー

林蔵は、筑波郡上平柳村（現：つくばみらい市）の農家に生まれ、村人から頭が良く「神童」と呼ばれていた。13才の時、難航する小貝川にかかる用水堰工事の作業に加わった事を機に、下条吉之助に地理や算術の才能を見込まれ、幕府の下役人となる。

寛政11年南千島に派遣され、伊能忠敬に測量技術を学び、後に忠敬が作成する日本で最初の実測地図である「大日本沿海輿地全図」の蝦夷地部分を作成する。

幕府は、林蔵と松田伝十郎に、ロシアや清国との関係を調べるため、樺太の調査を命じる。林蔵は、二回目の調査で、樺太が島であることを確認した。このことをシーボルトが著した『日本』という本の中で樺太と大陸間を「間宮海峡」と名付け全世界に紹介した。世界地図に名を残すただ一人の日本人である。

一方、勘定奉行遠山景晋の部下になり、幕府の隠密として全国各地を調査する。乞食に変装したときは、（着衣がボロボロなので）預かった資金を懷中に隠すのに苦労したと後々述懐している。

※林蔵とアイヌ人女性との間に生まれた娘の子孫が現在でも北海道に在籍している。

主な関連人物

伊能忠敬、松田伝十郎、近藤重蔵、平山行蔵など

主な文献

「間宮林蔵」（吉村昭・講談社文庫・1987年）
「間宮林蔵の再発見」（大谷恒彦・筑波書林・1982年）
「閉じられた海図」（古川薫・文藝春秋・1988年）



ストーリー

止幾は、茨城郡高野村（現：城里町）の修験道場を営む黒澤将吉の長女として生まれ、祖父から読み書きの教えを受ける。19歳の時結婚したが、夫の死別後、27歳で娘二人とともに実家に戻り、くしやかんざしなどの行商で家計を支える一方で、俳句や和歌を習い、行く先々で様々な知識を身につける。46歳で、行商先の草津で子供達に読み書きを教え、その後、安政元年(1854)実家で開いていた寺子屋を継ぐ。

幕末の混乱の中、外交問題で幕府と対立した徳川斉昭が謹慎処分になると、殿様の無実を天皇に訴えるため、安政6年(1859)京に旅立ち、公家に出入りしている人物に長歌を託しますが、大阪での幕府に捕えられ、重罪人護送用のかごに乘せられ江戸へ運ばれる。江戸での取り調べに「一人で考え行動した」ことを述べ、約7ヶ月後に牢から出される。

故郷へ戻った止幾は、私塾を自宅で始め、明治維新を迎え、明治5年の学制発布の翌年、68才で自宅の塾を小学校として開放し、自身も女性教師第1号となる。その後も85才で亡くなるまで、郷里の子供達の教育に尽力した。

主な関連人物

徳川斉昭など

主な文献

「茨城の顔」（室伏勇・茨城新聞社・1969）



ストーリー

東湖は、水戸藩の学者藤田幽谷の二男として生まれ、父は青藍舎という塾を開いており、幼いころから学問に興味を持ちながら成長。14歳の時、父に従って江戸の地を踏むと武道にもめざめ、神道無念流の岡田十松に入門。19歳の時、イギリスの捕鯨船員12人が大津港（現：北茨城市）に上陸し、父の命により、船員を斬るため自らの死を覚悟しながら現地に急行したが、捕鯨船は沖合に去ってしまった。

東湖は、20歳を過ぎたころから、「学問をおろそかにしては、武道も役に立たない」と考え、自分の生き方を反省する。その後水戸藩第9代藩主徳川斉昭の政治を支え、軍備の拡充や藩校弘道館の建設に取り組む。ところが、弘化元年(1844) 斉昭が改革政治の行き過ぎを幕府から咎められ、謹慎処分を受け、東湖も蟄居となってしまふ。このころ日本のあり方を思い、外国に左右されない国づくりを考え、書かれたのが「回天詩史」、「常陸帯」、「弘道館記述義」といった著作である。

嘉永5年罪を許された東湖は、翌6年ペリーの来航による海防問題の処理や、側用人の要職に就き、多忙な日々を送った。吉田松陰や西郷隆盛など、全国から多くの学者や志士たちが教えを受けに訪れるようになった。しかし、安政2年に江戸を襲った大地震により、藩邸にて母を助けようと犠牲になった。

主な関連人物

徳川斉昭、吉田松陰、西郷隆盛など

主な文献

「藤田東湖」（鈴木暎一・吉川弘文館・1998）
「水戸の先人達」（水戸市教育委員会・2000）



ストーリー

安兵衛は、河内郡田宮村（現：牛久市）の農家に生まれ、天保 10 年農家の木村家に養子となるも、農業に見切りをつけ、江戸に出る。明治 2 年、東京の新橋駅近くに「文英堂」という日本人を対象にしたパン屋を開きましたが、ヨーロッパ式の固焼きパンのため、日本人の口に合わず売れなかった。

その後、安兵衛は、日本人好みのパンを焼き上げるために、日本に古くからある餡を入れ、ふっくらとさせるため日本酒の酵母を使うことに気がついた。この「あんぱん」は評判が良く、毎日のように売上げが伸びた。そして、明治 7 年には銀座 4 丁目のレンガづくりの建物に「木村屋」の看板が掲げられた。

明治 8 年に、明治天皇に献上したあんぱんは、真ん中がへこんでいて、塩漬けした八重桜の花が付けられていたことから、「銀座名物へそパン」と人々から呼ばれ、店の名が一躍世に知られるようになった。

主な関連人物

明治天皇、山岡鉄舟など

主な文献

「郷土史に輝く人々」（青少年育成茨城県民会議・1971）

「茨城の先人達」（光文書院・1983）

「明治天皇あんパンを食す」2004 放送



ストーリー

八右衛門は、鹿島郡海老沢村（現：茨城町）に生まれ、嘉永2年に回船問屋の家督を継ぎますが、加倉井砂山の日新塾に入門し、文武両道に励む。砂山から「資産を増やすことについては第一人者」だと期待され、砂山の次女と結婚する。

その後、水戸藩が財政の立て直しを図っていること耳にすると、藩内で通用するお金を作るなど、学んできたことを現実のくらしの中で生かそうとした。

明治3年北海道開拓に従事し、官庁の為替業務を行うようになり、明治7年川崎組を創設。警視庁、千葉県、茨城県などの公金を扱うようになり、金融業面での才能を発揮する。

明治13年には、川崎組を銀行組織とし、川崎銀行と改め、頭取の座につく。三井・安田と並ぶ我が国を代表する私立銀行が誕生した。

また、八右衛門は、豊富な資金を茨城のために役立てようと、当時、茨城県と東京との間には鉄道はなく、馬車、水運が主力であったが、現在のJR水戸線、JR常磐線の敷設に資金を提供した。

日本の資本主義の発展を支えた実業家の一人です。

主な関連人物

徳川齊昭など

主な文献

「常陽藝文 137号」（常陽藝文センター・1994）



ストーリー

傳兵衛は、安政3年三河国松木島村（現：愛知県西尾市）の豪農の家に生まれながらも、家は貧困に苦しんでいたため、8歳で酒樽造りの弟子として働き、11歳の時商人として独立し、綿の仲買人や雑貨の行商を行っていたが、事業に失敗する。(16歳)

明治5年横浜にあったフランス人が経営する洋酒醸造所で働いていた時、命に関わる病気にかかったが、葡萄酒により体調を回復し、その滋養効果を知る。

明治7年家督を相続し、幼名松太郎から傳兵衛と改名し、19歳で横浜の会社を辞め、東京麻布の天野酒店に入り、酒の引き売りを始める。明治13年東京浅草に酒の一杯売り家「みかはや銘酒店」（後の神谷バー）を開く。

明治31年に念願の葡萄酒づくりに着手すべく、茨城県牛久市の原野を開墾し神谷葡萄園を開園。そして、明治36年醸造場の神谷シャトーを竣工させ、ワイン生産を開始するとともに、国産アルコールの品質改良にも大きく貢献するなど日本の洋酒の基礎を築く。

主な関連人物

勝海舟、板垣退助、松方正義、山口巖など

主な文献

「神谷傳兵衛とシャトーカミヤ」（斉藤英俊・第一法規・2008）
「神谷傳兵衛」（坂本箕山・NDL蔵書・大正10年）



ストーリー

大観は、水戸藩士酒井捨彦の長男として生まれ、後に親戚横山家の養子となる。11才の時に、父の仕事の関係で東京に転居し、中学を卒業すると、英語学校に入る傍ら、絵画塾にも通い、絵の世界に入っていく。

東京美術学校（現：東京芸術大学）の受験を毛筆画で合格し、卒業すると京都美術工芸学校（現：京都市立芸術大学）の教師となる。また、今まで本名で絵を描いてきたが、お経の中から「広く全てを見通す」という意味の「大観」を雅号とした。その後、東京美術学校の校長であった岡倉天心によって、母校の助教授となり、そして、明治30年の日本絵画協会の第2回共進会に「無我」を出品すると大好評を得た。

大観は、線ではなく色彩が大切だと考え、線のない描き方を始め、その作品は「朦朧体」と称された。

明治31年天心とともに、東京美術学校の内紛により、学校を追われるも、日本美術院を創設すると、その第1回展覧会に「屈原」という作品を出品し、全国に名を広める。しかし明治39年に経済的に行き詰まり、日本美術院を茨城県五浦（現：北茨城市）に移す。五浦では、「琉燈」等の素晴らしい作品を描くとともに、「生々流転」などの雄大な作品を完成させる。

昭和12年文化勲章受章すると共に、昭和29年には茨城県名誉県民に推される。

主な関連人物

岡倉天心、木村武山、菱田春草など

主な文献

「横山大観傳」（茨城県・1959年）



ストーリー

浪平は、栃木県下都賀郡家中村（現：都賀町）生まれ、明治21年小学校を卒業し、東京にある第一高等中学校（現：東京大学）入学を目指し、明治24年に見事に合格した。

その後、村井弦齋から「これからの社会は工業の中でも電気が注目され、電気の世の中になる」とアドバイスを受け、明治29年東京帝国大学電気工学科（現：東京大学）に入学する。

卒業後、藤田組に入社し小坂鉱山（秋田県）に電気主任技術者として赴任し、山止滝発電所を建設する。この鉱山で、後に日立鉱山を経営する久原房之助と出会う。

浪平は、31才の時、也笑夫人と結婚。その後広島水力電気株式会社、東京電燈株式会社を経て、日本人の手で電気機械を製作する仕事に従事したい思いのもと、明治39年に久原鉱業所日立鉱山（茨城県日立市）に就職する。

そして、小さな修理工場で、5人の仲間と外国製の機械の修理をしながら、研究を重ね、明治43年国産初の5馬力誘導電動機（モーター）を完成させ、久原鉱業所の機械工場として日立製作所を設立。大正9年には、久原鉱業所から、完全に独立して日立製作所を創業した。

主な関連人物

久原房之助、村井弦齋など

主な文献

「技術の日立を築いた人」（倉持正夫・教育企画出版・1987）



ストーリー

節は、国生村（現：常総市）の豪農の長男として生まれ、3才でいろは歌を読み、小倉百人一首を暗記するなど、神童・天才と言われた。

明治33年正岡子規の門下に入り、教えを受けるようになり、子規から一本の線香が燃え尽きるまでに、歌を作るように言われ、10首程の歌を作る。これが、節の誕生日である4月3日に『日本』に発表され、この驚きと喜びを「忘るべからざる楽しい日」と書いている。

節は、子規の死後、伊藤左千夫らとともに、雑誌「馬酔木」の発行にも努力するとともに、短歌から写生文、小説へと活躍の場を広げる。

明治41年から2年間は「ホトトギス」や「アララギ」と言う雑誌に小説を発表し、明治43年には夏目漱石の推薦により『土』が朝日新聞に掲載される。序文を書いた漱石は、「貧しい農民や鬼怒川など、この地方の特色をよく描いている」と書いている。

節は、文学ばかりでなく家業である農業にも取り組み、竹林栽培に熱心で、肥料の研究も行い有数の竹林経営者となった。その後、病気のため大正4年に亡くなる。

主な関連人物

正岡子規、伊藤左千夫、夏目漱石など

主な文献

「郷土の先人に学ぶ」（茨城県教育委員会・1986）



ストーリー

雨情は（本名：英吉）、多賀郡磯原村（現：北茨城市）の名家の長男として生まれ、中学卒業後、早稲田大学へ入学し、坪内逍遙と知り合い「ローカルカラーを主とした歌に力を注いで見たらどうか」という助言を受ける。

雨情は、父親の急死により帰郷するが、地元で詩作に励み、民謡詩集「枯草」を自費出版した。また、妻との離婚後、水戸市へ移り住み「茨城少年」の編集にあたる。

一方、苦しい生活のなか、月刊パンフレット民謡詩集「朝花夜花」を出すと、ようやく雨情の文学的名声が高まる。この詩集に「七つの子」の原形である「山鳥（やまがらす）」があり、大正10年本居長世の作曲により発表される。

その後、「船頭小唄」、「赤い靴」、「青い目の人形」等多くの作品を世に出すとともに、その間、国内ばかりでなく台湾、朝鮮、満州、蒙古に至るまで、童謡・民謡普及のための講演旅行を続ける等、民衆の間に歌い継がれてきた童謡・民謡を芸術的な水準にまで高める。

主な関連人物

石川啄木、坪内逍遙、住井すゑなど

主な文献

「野口雨情の生涯」（長久保片雲・暁印書館・1980）
「定本野口雨情（全八巻）」（未来社・1985～87）



ストーリー

日立市に生まれ、日立工業専修学校を卒業後上京して働きながら作曲を学ぶ。

正は、小学校に入学し、ガキ大将として飛び回っていたり、オルガンを弾いてクラスの皆に歌を教えたりしていましたが、成績は3番以下になることはなかった。専修学校に入学後、音楽好きの仲間で楽団を作り、マンドリンやギター、アコーディオン、バイオリンなどの楽器で町内の演芸会などに出演していた。

昭和14年に一本のギターを持って上京し、働きながら音楽の先生に基礎を教わっていましたが、昭和17年軍隊に入隊し、満州へ。その年、戦後大ヒットした「異国の丘」のもとになった歌を作曲した。

昭和20年戦場で生死をさまよう大けがをし、その後ロシア軍の捕虜となり、収容所では、木の皮やセメント袋の切れはしなどに歌詞を書き五線を引いて作曲していた。

昭和23年帰国後、ラジオ番組「のど自慢」で自分が作曲した「異国の丘」が歌われるなど大ヒットし、レコード会社に作曲家として入ることになった。その後「有楽町で逢いましょう」や「いつでも夢」など約 2400 曲に及ぶ歌謡曲を作り、国民に夢と希望と潤いを与えたとして国民栄誉賞を受賞した。

主な関連人物

古賀政男、フランク永井、鶴田浩二、松尾和子、橋幸夫、吉永小百合等

主な文献

「命ある限り吉田正・私の履歴書」(日立市民文化事業団・1986)
「常陽藝文253号」(常陽藝文・2004)



ストーリー

川崎市で生まれ、戦時中は、母親の実家のある笠間市に疎開し、多感な少年時代を笠間の自然と共に育んできた。昭和18年に発生した常磐線土浦駅列車衝突事故で多くの犠牲者を出した車輌に、疎開のため、笠間に向かっていた九ちゃんと母親は乗り合わせていたが、事故の直前に他の車輌に移っていたため難を逃れた。

九ちゃんは、後々「笠間稲荷神社の神様が自分を救ってくれた」と終生信仰したという。後には、女優柏木由紀子さんとの結婚式を「笠間稲荷神社」で挙げ、その後オープンカーで笠間市内をパレードした。

高校生の時、エルヴィス・プレスリーに憧れ、右に出る物がいなかったと言われるほど、プレスリーの物まねで人気者となった。

昭和33年、ザ・ドリフターズに加入し、ギターを担当したが、脱退。昭和34年に「題名のない唄だけど」でデビューしたが、ヒットしなかった。その後、ソロ歌手に転向し、昭和35年「悲しき六十才」が10万枚を売上げ初ヒットとなり、翌年「上を向いて歩こう」が日本国外で大ヒットし、米国ではSUKIYAKIと言うタイトルでヒットチャート3週連続1位を獲得した。

昭和60年8月日本航空123便墜落事故に遭遇、43才の若さで亡くなった。

主な関連人物

古賀政男、柏木由紀子、森繁久弥、美空ひばりなど

主な文献

「坂本九上を向いて歩こう」(日本図書センター・2001)
ドラマ「上を向いて歩こう」(坂本九物語テレビ東京・2005)



ストーリー

奈良県平野村（現：田原本町）の裕福な農家に生まれ、すゑが小学校へ通っていたころ、先生は、すゑを「さん」付けし、他の子供は呼び捨てしており、家が裕福かどうかで差別するはなぜだろうと、この時初めて実感する。

大正 8 年すゑが 17 歳の時東京の女性記者に採用されたが、女性社員の待遇の差別を感じ、1 年で退社。以後童話を執筆しながら、世の中の差別と闘う。

大正 10 年すゑは、犬田卯（農民文学者）と結婚。夫は、文学運動を通じて農民解放を目指し度重なる発行禁止、罰金処分を受ける。

すゑは、夫と四人の子供とともに、昭和 10 年、夫の郷里である茨城県牛久市の小川芋銭宅のすぐ近くに転居し、差別問題について、文学を通じて世の中の人々に訴えようと思うようになる。昭和 33 年、56 歳のすゑは、長年の思いを込めて「橋のない川」を書き始め、第六部まで書き続けた。このときすゑは 71 歳を迎えた。

平成 4 年、90 歳の時第七部を出版し、シリーズ全体で 830 万部のロングセラーとなり、映画にもなった。

主な関連人物

犬田卯、小川芋銭、野口雨情など

主な文献

「20 世紀茨城の群像」（茨城新聞社・1999）
「母・住井すゑ」増田れい子著



主なロケ地

いばらきフィルムコミッションでは、ホームページでロケ地 500 箇所を 2300 枚の写真で紹介。

砂浜（神栖市）



海岸（高萩市）



湖畔（龍ヶ崎市）



あぜ道（石岡市）



古道（常総市）



階段（笠間市）



木造橋（つくばみらい市）



林道（古河市）



河川（稲敷市）



竹道（常総市）



地下道（利根町）



古通り（桜川市）



ワープステーション江戸（つくばみらい市）



古寺院（石岡市）



木造校舎（大子町）



旧役場（常総市）



茅葺住宅（常総市）



レンガ造り（土浦市）



校舎（高萩市）



市役所（北茨城市）



洋風住宅（小美玉市）



空港（小美玉市）



街の施設（つくば市）



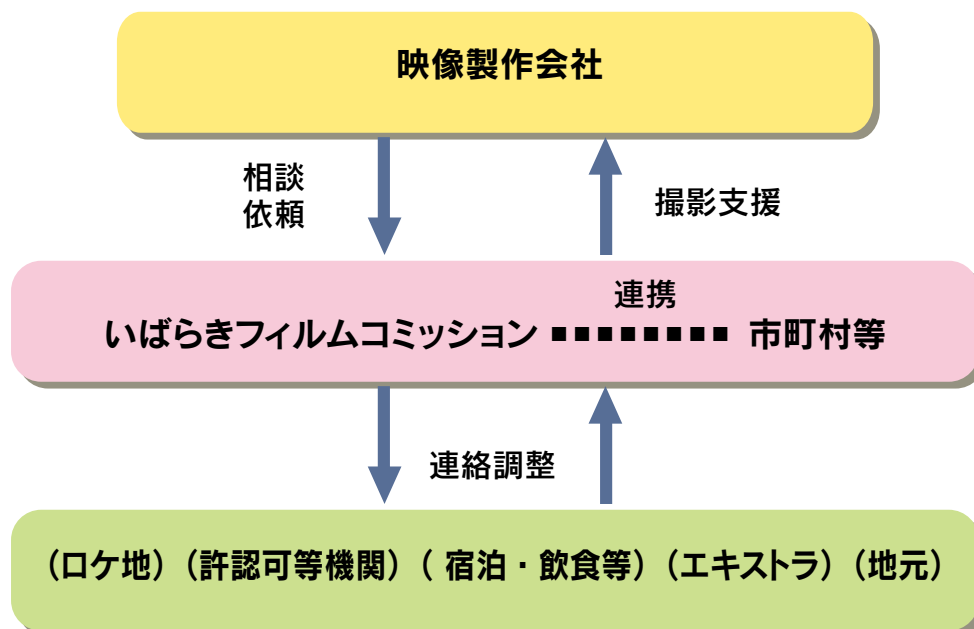
街の施設（筑西市）



支援内容

- ①ロケ地に関する相談・案内
- ②撮影に関する許認可等の手続きに対する協力
- ③宿泊施設，飲食店等の紹介
- ④エキストラ手配への協力
- ⑤地元住民への協力依頼

支援フロー





問い合わせ先

茨城県 フィルムコミッション推進室

〒310-8555 水戸市笠原町 987 番 6 TEL.029-301-2528

〈E-mail〉 ibaraki-fc@pref.ibaraki.lg.jp 〈URL〉 <http://www.ibaraki-fc.jp/>

いばらきフィルムコミッション

検索

